“家族時間 そして馬”

PROFILE

加山昌弘

加山興業（株）代表取締役 当協会理事

出身／名古屋市生まれ

血液型／A型

信条／時間を守る

夢／廃棄物のリサイクル（熱回収）

好きな言葉／信じなさい。そうすれば救われる。

嫌いなこと／なし

ATSUHIRO KAYAM

愛産協の中に世界の競馬場を巡り、競馬を思う存分楽しんでいるという“ケイバ通”がいるとの話を聞いてさっそくインタビューを試みた今回の「名人・達人 評判倶楽部」。馬のことはあまりわからないという花井さんのお相手は、当協会理事を務める加山興業（株）の加山社長。 さてどんなお話が飛び出したでしょうか。馬の話から話題は意外（？）な方向へ‥‥。

最初は「犬」からスタートして競馬へ。

——加山さんは馬、という漠とした情報があるのみで、犬猫のことしかわからない私としては、不安な気持ちでやってまいりました。馬全般がお好きなんでしょうか。それとも競馬でしょうか。

加山社長（以下加山に略）『競走馬、それと競馬場の雰囲気ですね。厳密に言うと、勝ち負けじゃなく、そこに至るプロセスを楽しむことですね。そのための旅行も含めてです。』

——キッカケはどんなところからでしょう。

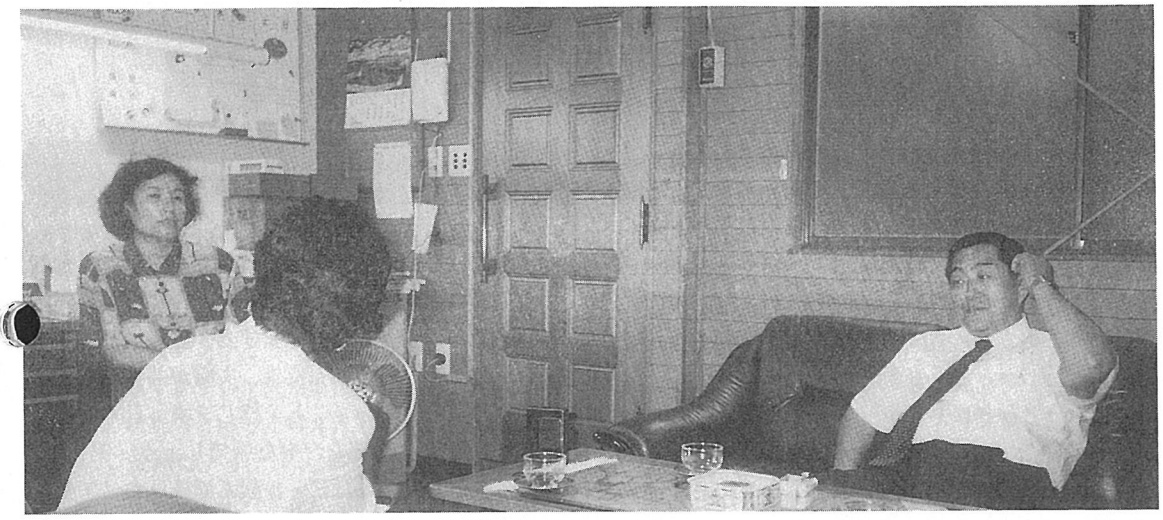
加山『家族そろってグアム島へ行った時にドッグレースをやったんですよ。3連勝単式というやつで、1、2、3着を当てるんですね。それが、1と2は当たったんですが3着はタメだった。ところがこの3着がアナザードッグ、つまり、登録外の犬だったんです。それで1着2着に配当があって。生まれて初めてした賭け事だったわけですが、あ、結構楽しいナと（笑）。もう15年以上も前の話ですけどね。』

——最初は「犬」だったんですねぇ。それが「馬」になって、あとはまっしぐらですか。

加山『馬初体験は名古屋競馬場でしたね。全国に中央競馬の競馬場が10ヶ所あるんですが、これを8ヶ所まで制覇しました。この中では京都が一番ですね。関西のメイン競馬場なんですが、林の中にあって非常に景観がいいんです。札幌も印象的でしたね。夏に行くと涼しげでとてもいい。たいていはカミさんと、たまには息子とも行きますが、一日は馬につき合ってもらう。もう一日はこちらがカミさんなり、息子なりの楽しみにつき合う、という風にバランス取ってます。』

——わぁ、いいですねぇ。理想的な家族旅行（笑）。

加山『基本は私の場合、それなんですよ。家族とできるだけ一緒にいたいんです。でも、なかなか共有できる時間って取れないでしょう。今までの男の人生観、世界観からすると、ちょっと違うかも知れませんが‥‥。』



――いやいや、そんなことはない。本当は今までもそうあるべきだったのに、できなかった人が多過ぎただけのことじゃないですか。うらやましいです。（傍らの奥さんに向かって）奥さんも一緒に馬券を買われるんですか。

加山『彼女は徹底してるんですよ。絶対千円以上買わない。一年に一度、少し大きいのが当たれば確実にプラスマイナスゼロになる。でもね、正直な話、好きじゃないと思うんですね。それをまぁ仕方ないな、でついて来てくれる（奥さん、黙ったままニコニコ）。僕はお酒飲んで遅く帰るということはありませんからね。ま、健全な趣味だと思ってます。旅行も物見遊山だけでは、ちょっと淋しい気がしますから、こうした趣味も交えてね、家族が楽しめればと考えるんですが。』

――「競馬はロマンだ」というようなコピーがありましたが、加山さんにとって競馬そのものの魅力は、どういうところにありますか。

加山『いやぁこれはね、自分が買った馬券が入った時の、あの興奮というもの、自分が二十歳の時に感じたそういう気持ちと、おそらく一緒だろうと思うんです。それと世界にもいろんな競馬場がありますし、それぞれにいろんなシステム、いろんな勝ち馬投票券というものがあるわけですね。それについてのお国がら、たとえば宗教的な問題もあるでしょうし、そういうものを見ようと思えば、見ることができるわけです。これも興味深いです。アメリカ、オーストラリア、イギリス、タイ、韓国、フランスといろいろ行って来ましたが、いわば競馬というものを通じて、その国を見ることができるわけです。』

――じゃあ、まずそのシステムの違いみたいなものを、わかりやすく教えてください。

加山『たとえば、バンコクなんかは日本のように連勝複式、1着2着を当てるというのはないんです。単勝オンリーです。単勝か複勝、3着までに来てると配当がもらえるわけなんです。日本は連複、連単。英語で言うと「キネラ」。でも、あちらには3着まで当てる3連勝単式ですとか、四着まで当てるものもある。』

――難しいですねぇ‥‥。かなりの分析力と情報収集力が必要になるんじゃないですか。

加山『いやぁ、ほとんど勘でしょう。これは息子に教えてもらったんですが、日本の場合、18頭走れば、1着2着を当てる方式は18×17÷2なんだそうです。息子は工学部で数学が強いもんですから、他にもいろいろ教えてもらったんですが、3着までを当てるとなると今度は18×17×16÷3なんだそうです。すると的中の確率は、何千分の一になってしまいますよね。すると、もう勘じゃないかなぁと。レー

スのシステムというのはまだまだありましてね。1レースの勝ち馬だけじゃなく、1レースと2レースの1、2着を当てるのですとか。これは外国、特に香港競馬などの特徴ですね。3レースから8レースまでの1着を全部当てるというのもあるくらいです。こういうことから、国を統治する統治者側の意図がありありとわかってきます。』

――日本はどうでしょうか。

加山『日本の場合は鎖国の例があるように、規制という面では最たるものを持ってると思います。馬も外国から来た馬は、日本の重賞レースに出られない。これがフランスやイギリスですと、まさに馬は多国籍なんです。』

――香港の競馬は熱狂的らしいですね。

加山『まさに競馬によって国民が我を忘れて熱狂しますね。公認の賭け事は香港の場合、競馬しかないんです。それも週2回なんですね。これは思うんですが、髪の毛の黒い人種というのは、総体的に賭け事が好きなんじゃないでしょうか。』

――映画などでイギリスの競馬場の雰囲気を見ますと、とてもハイグレードな感じがしますが。

加山夫人（思い出すかのように）『ええ、ホントにきれいな競馬場ですよ。重賞レースの時などは皆さんドレスアップしてみえますしね。林の中にあって、景観もいいです。』

加山『イギリスの競馬場なんかは、自然にあった土地を競馬場になるように作ったわけです。競馬場にするために周りから変えてしまう、日本やアメリカのようなやり方とは違うんですね。イギリスで圧巻なのは、シートに階級意識が反映されていることです。スペシャルシートなど、お金を出せば誰でも座れるというものじゃない。あなたはこの階級だからここへ、みたいなのがあるんですよ。私たちはツーリストですから特別扱いしてもらって、そういう人達の隣の方の席に座らせてもらった（笑）。』

夫婦、家族の絆を強めるには時間を共有すること

――国の性格や歴史の影響と行ったものが、見られるんですね競馬に。

加山『ヨーロッパへ行きますと、競馬はレクリエーションですね。それと家族、夫婦が共有しあう楽しむもの、そういったことを感じます。日本の夫婦や家族はそうした部分が少ないでしょう。例えば、食事時などお父さんはビール飲んで枝豆食べてテレビを見てる。僕はそういうのがイヤなんです。とってもイヤなんです。家族というものは、やはり寄り合って、今日一日のそれぞれの話に耳を傾ける。それも日常の仕事だと思うんです。家の中だけじゃなく、外へ出ても、やはりもっともっと共有できる時間や共通した話題を持つことができれば、家族としての楽しみも増えますよね。それは何であっても構わないんですが、僕は競馬をそのひとつとして考えたいと思っているんです。』

――そうした加山さんの家庭、家族の考え方、いわばコンセプトといったものは、結婚生活を経ていくうちにできあがって来たものなんですか。

加山『いや、それ以前ですね。昔から、自分の両親も含めていろんな夫婦を見てて、一緒に暮らしていて、どうしてこうなっちゃうんだろうと僕には理解し難かった。ああなりたくはないと、ずっと思って来たんです。極端な話ですが、僕はカミさんとできるだけ一緒にいたい。いつもいっしょにいたいから結婚したんだろうと思うし、いつも一緒にいれば当然、相手のいうことに反論したり、憎しみ合ったりということも出てきますよね。でも、僕はそれを子供に見せたい、見せていくことが大切だと思っています。そのためには共通した部分の話を作っていかなきゃならない。僕は男だけでやる遊びとか、仲間だけでどこか行くとか、基本的に好きじゃない

INTERVIEWER

花井　美紀

（株）コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネイター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。

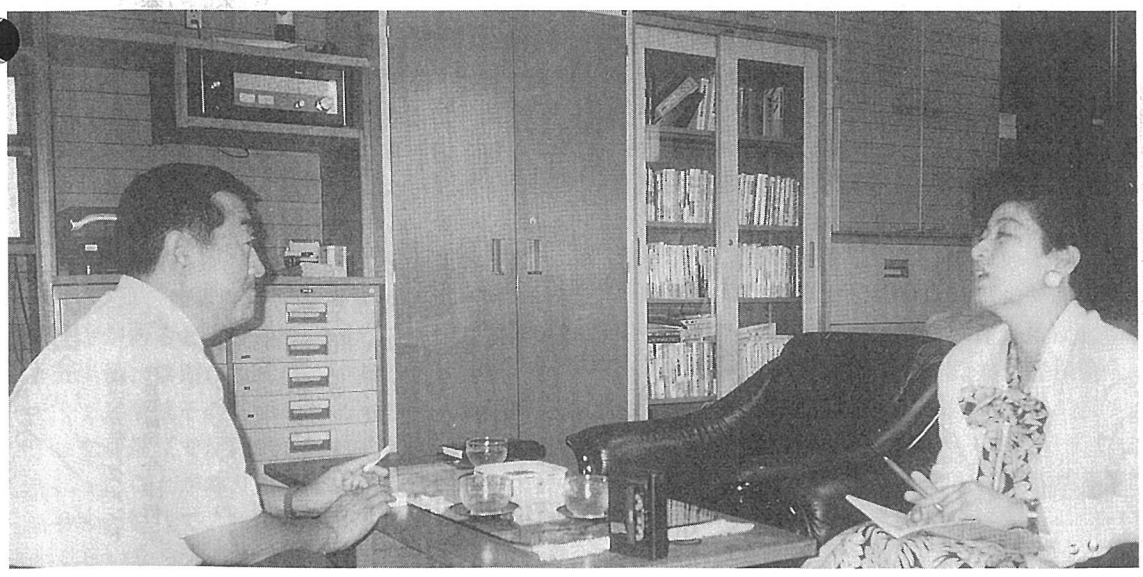
んです。やるなら女房と一緒にやれるもの。行くなら女房と一緒に行けるところ。ゴルフなんかも女房ができるようになって一緒に回れるんなら行きたいと思っています。』

――帰って夫に聞かせたいようなお話です（笑）。欧米など、夫婦がひとつの単位として認識され、社会性を持ってますし、夫婦単位で行動し、時間を共にするのが当然といった考え方ですが、加山さんご夫妻のご夫婦のアイデンティティーみたいなものは、お二人ならではの感じがします。じゃあ、最後に競馬がらみの、最近の印象的なご家族の思い出を。

加山『オーストラリアのゴールドコースト競馬場へ行った時のことなんですが、ちょうど武豊が来てました。それで単勝を武豊でボンと買ったところ、旅行費がかなり浮きました。そんなにたくさんは買いませんし、買えません。楽しみためのものですし、損して二度とやらないというんじゃ意味がないです。カミさんと二人で、子供連れて、キャーキャー言って、これで いいですよ。』

――奥さんと寄り添って、周りに子供さんがいて、笑いさんざめいて‥‥。

加山『子供の頃から思ってたんですが、母親と子供の密接な関係、これは父親にはないですね。見えざる空間がある。僕は母親的な発想かも知れませんが、その空間を埋めたいという欲求があったんですね。夫婦はいつも一緒にいるもの。それを子供が見ることによって、おのずとそうしたことが可能になっていくんじゃないかと思います。』

――そうした家族観が、競馬に結びついていくんですね。

加山『いやぁ、今日は趣旨として、競馬の話をもっとしないといかんのですが（笑）。』